



クラウドサービスの安全な活用はビジネスの基盤 CASB による可視化で事業の成長を支える



日本の広告業界を常に牽引してきた国内電通グループにおいて、いまもっとも成長しているデジタルマーケティング分野の中核企業が、株式会社電通デジタルです。同社では社員が多様なクラウドサービスを安全に活用できる環境を目指し、クラウドアクセス可視化・制御ソリューション (CASB) の Netskope を導入。今後も成長が見込まれるデジタル事業を支える「働き方開発」を掲げ、働き方改革の先を見据えた安全で持続可能な事業基盤の強化を実現しています。

クラウドサービスを安全に活用するため ゼロトラストネットワークでセキュリティを再構築

日本の広告業界をリードしてきた国内電通グループの中で、成長著しいデジタルマーケティングの専門会社として株式会社電通デジタルは 2016 年に設立されました。同社は、「ワクワクするデジタルへ」をスローガンに掲げ、クライアントの事業成長に貢献し、世の中にイノベーションを創出するとともに人々を幸せにすることを目指しています。そんな中、変化の激しいデジタルマーケティング分野において、最適なクラウドサービスの活用は必要不可欠な要件です。

情報システム部内で社内 IT の企画や PMO の推進マネージャーを務めるコーポレート部門 情報システム部 企画グループマネージャー橋本 訓氏は、2018 年にスタートした現在の取組みについて次のように語ります。「もともとクラウドサービスを積極的に活用し、業務効率化や顧客サービスの向上を図っていました。一方で、従来型の社内・社外を区別するゾーンディフェンスに基づく境界防御型のネットワーク環境は、シャドー IT の温床になっているなど、適切なサービスを提供することの妨げにもなりつつありました。そこで、ゼロトラストの考え方をベースにネットワークを再構築し、多様なクラウドサービスの安全な提供を情報システム部として担保するとともに、その利用状況の把握と安全性の管理のために必要なソリューションが CASB だったのです」。

エージェント型の CASB による リアルタイムな状況把握が安全な活用の第一歩

ネットワークセキュリティ強化のプロジェクトは、クラウドサービスの利用状況を把握し最適化するための CASB 導入、エンドポイントセキュリティ強化のための EDR 導入、ID 管理とシングルサインオンのための IdP 構築という 3 つの主要なプロジェクトを並行して進めました。このような取り組みを順調に進めることができた背景として、「マネジメントが情報セキュリティを IT としての課題ではなく、ビジネス課題として認識していたことは大きいです」と橋本氏は振り返ります。

DENTSU
DIGITAL

株式会社電通デジタル
<https://www.dentsudigital.co.jp>

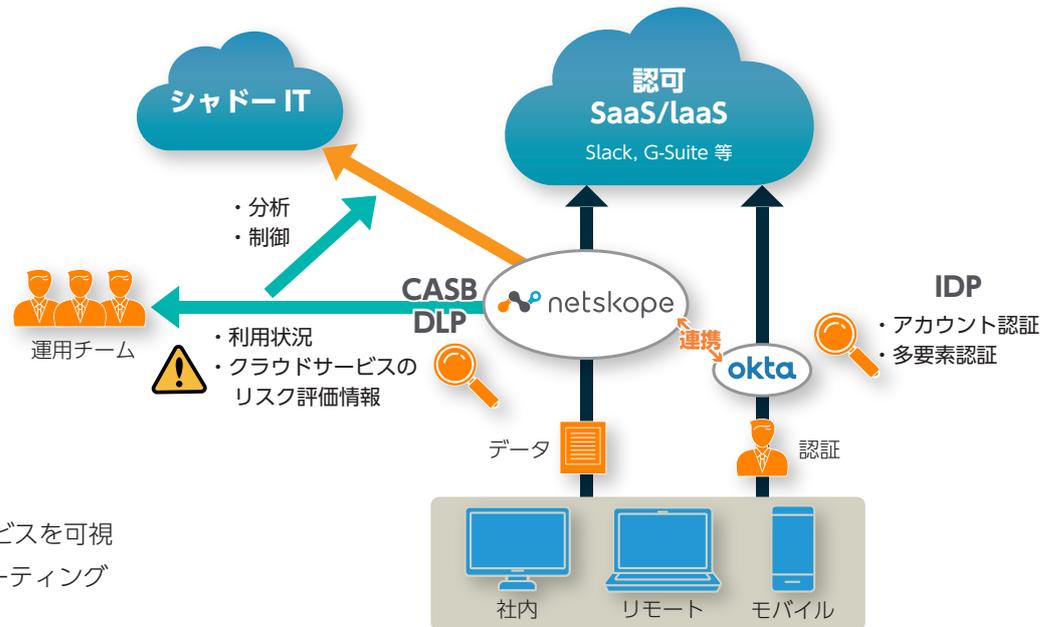
会社概要：

株式会社電通デジタルは、国内電通グループのデジタルマーケティング専門会社として、2016 年に設立されました。「情報革命の上に、一人ひとりの幸せをつくる」をミッションとして、デジタルマーケティングの全領域に対して、「コンサルティング」、「開発・実装」、「運用・実行」の機能を持ち、統合的で最先端のマーケティングサービスを提供しています。テクノロジーやデータ、クリエイティブなど各領域のプロフェッショナルが、電通グループ各社の連携によりシナジーを創出し、クライアントの事業成長パートナーとしてビジネスの成功に貢献します。



株式会社電通デジタル
コーポレート部門情報システム部
企画グループマネージャー
橋本 訓氏

システム構成図



500以上のクラウドサービスを可視化し、CCI機能によるレーティングによりリスク管理

2019年5月に具体的な検討が開始されたCASB導入プロジェクトでしたが、製品選定をする上で最も重視したポイントは明確でした。「利用するエンドポイントデバイスがPCだけでなく、スマートフォンなども対象になり、またリアルタイムに状況把握ができることから、エージェント型であることを要件にしました」。さらに、「第三者の調査レポートによる評価などを総合し、最終的には実質Netskopeの一択でした」（橋本氏）

2019年10月より、PoC(Proof of Concept：概念実証)を開始し、エンドポイントデバイスへのエージェントの配布設計、パフォーマンスの検証、コンソールでのレポート機能の確認などを経て11月に全社展開を果たしました。エージェント型で懸念されるデバイス側でのパフォーマンス低下の影響についても「大きな影響はなく、運用開始後もパフォーマンスに関する問い合わせはありません」（橋本氏）

想定以上の数のクラウド利用にCCIをフル活用してリスクマネジメント

Netskopeの導入は順調に進み、クラウドの利用状況の把握が可能になったとともに、新たな気づきもありました。その一つが、従業員が利用しているクラウドサービスの数です。「実際に可視化してみると、利用されているサービスが500を超えていました。ある程度数が多いとは想定していましたが、ここまでの数だとは思いませんでした」（橋本氏）

次に課題となるのは、可視化されたサービスの評価です。同社ではNetskopeが提供するCCI(Cloud Confidence Index)機能を活用して、利用されているサービスのリスク分析を行っています。CCIはNetskopeの分析部門が世界中のクラウドサービスをトラッキングし、サービスレベルのリスクをレーティングする辞書機能です。

CCIについて、橋本氏は「客観的な安全性のレーティングはわかりやすく、社内でも数多く利用されている各サービスの評価に役立っています」

す。また、新規に利用申請されてくるサービスも事前に評価でき、リスクをコントロールできます」と評価します。

同社ではクラウドサービスの利用を積極的に活用するスタンスをとり、決して制限をするために可視化をしているわけではありません。しかしながら、リスクのあるサービスを認識することは安全な活用を推進するための出発点です。

さらに、すでに利用中のクラウドサービスに関しても、リスクが高いと評価されたサービスを安全に活用するためにベンダーと建設的なコミュニケーションをする際、Netskopeが活かされています。

安全なクラウド活用を推進し、ビジネスを支えるITを実践

クラウドサービスの安全な活用を目指して、ゼロトラストネットワークの考え方に基づくセキュリティの実装と、その起点となるサービスの利用状況の可視化のためのCASB導入を順調に進めた同社。この先のゴールについて、業務プロセスの標準化と可視化の強化の2点を見定めています。

「事業部門においては、それぞれの事業に応じた多種多様なクラウドサービスが利用されており、またビジネスの変化が激しいため、その利用は拡大していきます。より安全で適切なクラウドサービスの利用を推進することで事業部門を効率よくサポートし、ビジネスの拡大へ貢献したいと考えています」（橋本氏）

さらに、可視化のレベルを上げ、レポートの内容の強化や自動化を進めるとともに、そこから得られた知見を業務プロセスの標準化にフィードバックするというサイクルを確立し、安全なクラウドサービスの活用環境の提供とビジネスへの貢献を目指しています。デジタルマーケティングのリーディングカンパニーとして、同社の社会的なミッションを果たすための重要な基盤として進化し続けるでしょう。

Netskopeはクラウドセキュリティのリーディングカンパニーです。企業や組織がセキュリティを犠牲にすることなく、最大限クラウドやWebを利用できるようにするためのソリューションを提供いたします。特許取得済みのCloud XD テクノロジーを使用し、あらゆるクラウドサービスやWebサイトでのユーザーのアクティビティを可視化・制御します。それによりお客様は、360°のデータ保護および脅威防御である「スマートクラウドセキュリティ」を手に入れることができます。ご興味をお持ちの方はぜひ弊社のWebサイト（www.netskope.com/jp）にお越しいただくか、japan@netskope.comへご連絡ください。